校長通信（教職員版）第５５号　２０１８．１０．２

フランスの高校生は、こんな風に勉強し、こんな大学入試を受けている！

【１】はじめに

【当日プログラム】

15:00～ 開会挨拶・主旨説明
川嶋太津夫　大阪大学高等教育･入試研究開発センター長

15:10～ 背景説明
「フランス高等教育の概要、
バカロレア試験・大学入試改革」
田川千尋　大阪大学高等教育･入試研究開発センター 特任講師

15:25～ 講演１
「バカロレア試験で問われる思考力とその育成：
高校の理系・文系科目の実践例を通して」
細尾萌子氏　立命館大学 准教授

16:05～ 講演２
「バカロレア入試哲学試験 および
これに向けた指導について」
坂本尚志氏　京都薬科大学 准教授

16:55～ 指定討論
上野佳哉氏　大阪府立[redacted]高等学校校長

17:05～ 質疑応答、全体ディスカッション

18:00　閉会

１０月１２日（金）、大阪大学高等教育・入試研究開発センターが主催し、フランス教育学会が共催する「思考力の育成と評価～論述型試験フランスの大学入試“バカロレア試験”の事例から考える～」というセミナーにコメンテーターとして参加することは、前回の校長通信でお伝えしました。報告する予定はなかったのですが、細尾先生によるフランスの二つの高校のフィールドワークの報告が非常に興味深かったので、お伝えしようと思います。当日のプログラムは、左図です。私は、ほんの１０分ほど話しただけですが、後で朝日新聞の記者からインタビューを受けました。

細尾先生は、２０１８年2月4日～2月9日に、フランスのヒレー・ド・シャルドネ高校とマシアス高校を訪問し、３教科（歴史・地理、英語、数学）について、授業観察と指導方法や教育観に関して教員にインタビューされました。ヒレー・ド・シャルネド高校は、2017 年度のフランスバカロレアの順位で、777 位／2277 校、マシアス高校は、2277 位です。保護者の社会構成は、ほぼ同じということが分かっていますので、この差がどこから生まれてくるのかというのは、細尾先生も興味を引かれたようです。そのことについては、最後に述べたいと思います。

【2】フランスの高校生はこんな授業を受けて、こんな大学入試を受けている！

まずは、細尾先生がフィールドワークをした二つの高校の教員へのインタビューの一部を紹介します。歴史・地理からです。歴史・地理という教科名からして、一人の教師が歴史と地理を担当しています。まず、この点が、日本と大きく違います。新学習指導要領では、歴史総合という科目が新設され、日本史の先生が教えるのか世界史の先生が教えるのかが、話題になりますが、フランスでは、地理も歴史も同じ先生が教えているようです。

①歴史・地理（下線部は細尾先生の発表資料に記載されていました）

	ヒレー・ド・シャルドネ高校	マシアス高校
インタビューされた先生	Lesage 教員　教員歴３４年	Borey 教員　教員歴３１年
授業で重視していること	・知識を関連づけて思考する力を重視する。市民としても、どんな仕事をする上でも重要だから。	・学び方を学ばせる。 ・現実の世界と歴史・地理とのつながりを理解させる。生徒が今の世界を理解し、市民としての意見をもてるようにするため。そのため、教師が中立的な立場に立つことに留意しつつ、トランプのイスラエル問題など、現在の政治問題も扱う。
授業を理解していない生徒への対応法	・授業を積極的に受けなかったり、自ら努力をしなかったりする生徒は助けない。	・理解していない生徒は放置せず、個別に支援する。

	・積極的に学んでいるのに困難を抱える生徒には、学習方法の個別指導を行う。 ・もっと板書して、と生徒によく言われるが、黒板には大事なことしか書かない。たくさん書くと、生徒は板書をノートに写すだけになり、生徒の自律性を奪ってしまうから。生徒が学習主体でなければならない。大学で、一人で学ぶ練習としても重要。	・課題で何が求められているのか、どんな間違いがありえるのかを生徒と一緒に分析して、課題の評価基準を作る。この評価基準を生徒に与えて、何ができていて、何ができていないのか、生徒が自己評価できるようにししている。
テストや評価方法	・単元ごとに論述の課題を出し、その点数の平均点で成績を出す。課題の答案は添削して返す。	・１学期（３ヶ月）に３～５の論述の課題を出し、答案を添削し、点数とコメント、評価基準をつけて返す。この点数の平均点で成績をつける。
論述の方法論と指導	・単元末に、単元の内容に関する短い小論文を書かせ、生徒数人に読ませる。それを生徒に相互評価させ、要素を表にまとめてクラス全体で小論文を作る。 ・バカロレア試験の小論文の型で授業を構成することで慣れさせる。 ・あるリトグラフ（石版画）がフランスをどのように説明しているかを数人の生徒に発問しながら解説するなど、資料を分析して歴史・地理の概念を見出す方法論を指導。	・年度の初めに、小論文の導入部の練習として、題の分析方法を指導する。 ・授業で問題演習する時間を確保するために、反転授業を導入している。教師は授業の前に、学校のサイトに、短い動画やパワーポイントなどの資料を配信する。生徒は授業までにそれを家庭で見て、選択肢問題を解いて知識の習得をする。授業ではこの予習を前提として、問題演習（短い論述問題）を行う。
協同学習	・１年生と２年生ではよく行う。生徒同士で議論することで、授業テーマの理解が深まる。	・１年生と２年生ではグループ学習を行う。グループごとに異なる課題を与え、各グループに発表させる。生徒同士で相談しやすく、学び合える。

フランスの歴史・地理の授業では、プリント学習で穴埋めをするなどの授業をやっているようには思えません。やたら、小論文、論述試験を課しています。なぜでしょう？英語や数学の授業を紹介する前に、なぜ、このように論述させているのかを説明します。それは、フランスの高校卒業認定試験兼大学入学検定試験の性質をもつ、フランスバカロレアに原因があります。つまり大学入試問題に原因があるのです。どんな試験なのか 2016 年度の歴史・地理の試験問題を紹介しましょう。それが次の問題です。

授業で学んだことに基づいて、次の主題について論じなさい。

「フランスの第二次世界大戦に関する歴史家と記憶」

これだけです。試験時間は、なんと4時間で２問！あと１問、同じような問題が出題されます。渡される解答用紙は、Ａ４の真っ白な紙！「なんじゃこりゃ！」というような試験問題です。選択肢も、穴埋めもマークも何もありません。ひたすら、自分の考えをまとめて書くという試験なのです。フランスの大学入試問題は論述！だから、高校も記述や論述の授業をやっているのです。ただ、誤解をしてはいけないので言っておきますが、この「フランスの第二次世界大戦に関する歴史家と記憶」というテーマは、高校生が初めて試験で目にするテーマではなくて、教科書（学習指導要領）に同じ名前の章があるのです。その授業を参考に生徒は論述することになります。それでも、このテーマの模範解答は、何字書かれていると思いますか？細尾先生の資料では、途中が省略されているので正確なことはわかりませんが、セミナーで提示された資料だけでも約３０００字以上です。受験者は、

【主題の定義】→【問題構成】→【論述プランの告知】→【展開①】→【展開②】→【結論】

の形式に沿って論述していきます。まるで大学の論文と同じです。ヒレー・ド・シャルドネ高校の先生のインタビューにもあるように、「大学で、一人で学ぶ練習としても重要」と。細尾先生によるこの問題の分析を紹介します。

・過去に対する個人的・情動的な経験に基づく「記憶」と、偏向せず歴史を客観的に理解する「歴史学」の対立を論じる題。まず、導入部で、主題の中の「記憶」という語を定義し、記憶による歴史と歴史学としての歴史を区別し、それを問題構成として一文にまとめる（論の課題設定）。さらに、論述プラン（ここでは年代順）を示す。次に複数の部に分けて展開部を論じる（第一部：1945 年から 1970 年は、ド・ゴールら政治権力が、国民の融合のため、レジスタンスの神話的記憶のみを、公的な記憶として押し付けた。第二部：1970 年代以降のフランスは歴史を客観的に捉えるようになり、対独協力者やユダヤ人の強制移送もふくめた複数の記憶が認知されるようになった）。展開部では、関連する概念（レジスタンス賛美主義など）や知識（年代・人物・作品など）を引用し、意味づける。最後に結論部で、問題構成に対して答える。

このような問題作成を日本史の問題で行うとしたら、どんな問題になるでしょう？考えるとおもしろいですね。数学の教師の私が考えるとすれば、こんな問題を思いつきます。

「江戸三大改革のそれぞれの特徴とその問題点を整理し、田沼時代の政策との比較検討を行え。その際、重農主義、重商主義について、必ず触れること」

如何ですか？今の日本史は、かなり私たちが習ったときと歴史的な評価が違っています。このことを問う問題もおもしろいと思います。それでは、次に英語の授業を紹介しましょう。

②英語

	ヒレー・ド・シャルドネ高校	マシアス高校
インタビューされた先生	Roudier 教員　教員歴２１年	Jani 教員　教員歴２３年
授業で重視していること	・理解と表現の両方。	・生徒たちは成功できることを生徒たちに示す。 ・英語に興味を持たせる。活気のある授業に生徒が参加する。 ・安心感を持たせる。
授業を理解していない生徒への対応法	・生徒の学力レベルや学習リズムに合わせて学習活動を差異化。 ・困難を抱える生徒を集めて授業外で個別指導。 ・協同学習で生徒同士説明し合うことも、困難を抱える生徒のシンポにつながっている。	・間違いが多い箇所を一斉に補習したり、個別指導したりする。 ・生徒の答案に間違いがある場合は、間違いの性質（「時制」「語彙」など）をコメントするだけで、間違い自体は修正しない。代わりに、生徒に間違いを修正させ、確認する。間違いを修正できていない場合は、なぜ間違いかを説明し、解決法を与える。
テストや評価方法	・授業中の形成的評価（口頭か筆記の短い課題）をたくさん行う。単元末の課題と、生徒の活動を観察して見取ったコンピテンシーと、バカロレア試験形式の課題の点数の平均点で成績をつける。	・１学期（３ヶ月）につき４回ほど課題を与え、その点数の平均点で成績をつける。
論述の方法論と指導	・生徒が市民として思考し、社会に参画できるようにするため、中学校から段階的に行っていく。中学校では文法と、基礎的な語彙について学ぶ。高校では、文法についてはほとんど扱わず、英語で分析し、表現し、議論することに重点を置く。１年生では自分の生活について語れるように、２年生では生活から離れたことも説明できるように、３年生では良い点と課題や賛否を分析し、論証できるように。	・年度初めに方法論を説明する。
協同学習	・全ての授業で行う。生徒同士助け合えるように、学力レベル混合のグループを教師が作る。	・よく行う。学力レベル混合のグループを教師が作る。困難を抱える生徒は他の生徒や質問がしやすく、安心できる。学力の高い

		生徒は他の生徒からの質問に答えることで自信を持てる。双方に生産的。
発問	・よくする。生徒が英語で話すようにするために、教師は極力話さない。課題について生徒が発表し、生徒がコメントや質問、相互評価（良い点と問題点）をし合う。課題は、シリアの子ども、薬物中毒者など、グループごとに異なる対象について、チャリティーを呼び掛けるスライドをパワーポイントで作成するなど。	・よく行う。生徒が英語で話すことが大事だから。

歴史・地理と同じようにフランスバカロレアの英語の試験を紹介しましょう。
受験生は、次の３つの資料を配布されます。Ａ（文章）Ｂ（文章）Ｃ（写真）です。それぞれは次のような内容の資料です。
Document　A
２０世紀初頭のニューヨークのマンハッタンで、急速に都市化（橋、地下鉄、高層建築）が進み、田舎の風景や野生生物が脅かされている。釣りをしている二人の男、Eddie と Beck がこのことを心配し、都市化に対して怒っているという話。Beck は野生生物の密猟者をライフルで追い回している一方、Eddie は何もしていない。
Document　B
富裕層向けのニューヨークの超高層マンションを日照権の規制に合わせるため、ウェディングケーキのように上層ほど狭くするアイディアが考え出されたという話
Document　C
How green could New York City be?
緑化されたニューヨークの未来予想図のイメージ画像
この３つの資料を渡された受験生は、次のような問題に挑みます。

問題１　In your own words, compare and contrast the visions of progress given in the three documents.
模範解答を示しましょう。

In document A, urbanization is not seen as a sign of progress but rather as a threat, to both nature and humans. In document B however, controlled urbanization is praised and admired for its beauty and creativity, even though this particular form of progress seems to benefit mostly the wealthiest. Document C goes further by including nature in the city. In this utopia, progress is fantasized as a way to improve everyone`s quality of life.

問題２　Eddie finally decides to talk to Beck. Write their conversation about the future of Manhattan.
これには、条件があります。300 語±１０%の語数で書くという条件です。それでは、模範解答を示しましょう。いや、やめておきましょう。一度、**Eddie** と **Beck** がどんな会話をするか、日本語で考えてみてください。最後に模範解答を提示します。
この英語の問題も単語の並べ替えや、選択肢はありません。いきなり、英作です。それもかなりの長文読解を踏まえての英作です。英語は３時間の試験で２１－23 問ほど出題されます。歴史・地理と同じように細尾先生の問題分析を紹介します。

・内容理解：二つの文章と一つの写真という複数の資料の中から情報を選択し、問題文で示された視点（進歩の見方）に即して比較・関連付け、文章としてまとめる力が問われている。自然と都市化を両立させるという進歩のあり方が、裕福な人たちだけのためのものであるという、立場の限界を示す批判的な思考も求められている。
・表現：資料（小説）のテーマ、論点、登場人物の性格を、会話文の内容や表現に反映させることが求められる（マンハッタンの急激な都市化で野生動物や田園風景が失われることを二人は心配していることや、マンハッタンの未来像に触れる。ベックの攻撃的な性格に基づき、ベックの口調や話の内容を荒っぽくする）。また、会話文であるので、短縮表現や口語表現が求められる。さらに、ひとまとまりの自然なストーリーとなるように、二人が話をするに至るきっかけや、話のオチも考える必要がある。

それでは、最後に数学の授業を紹介しましょう。

③数学

	ヒレー・ド・シャルドネ高校	マシアス高校
インタビューされた先生	AMP 教員	Laur 教員
授業で重視していること	・論証するコンピテンシー	・診断的評価で把握した生徒の習得状況に応じて指導する概念や方法を調整。
授業を理解していない生徒への対応法	・授業を聞いていない生徒は放置する。熱心な生徒で困難を抱えていたら、個別指導に応じる。	・個別指導か、グループで教え合いをさせる。
テストや評価方法	・形成的評価として、バカロレア試験の過去問などを宿題に出し、A～E の評価とコメントをつける（成績に入れない） ・毎週課題を出し、その点数の平均点で成績をつける。課題の答案は添削して返却する。	・各単元の初めにテストか口頭で診断的評価。 ・宿題及び単元途中のテスト（５０%）＋単元の最後のテスト（５０%）で成績をつける。単元途中のテストで点数が悪かったら、再テストを行い、高かった方の点数を入れる。
論述の方法論と指導	・論証の論理の説明をする	・授業の学習内容に適応する宿題を出し、添削し、論述の力を高めている。宿題のできが悪い生徒には個別指導。 ・問題を解かせた後、問題を解くために必要な方法論を生徒に表にまとめさせて、クラス間で検討させる。
協同学習	・１年生と２年生では行う。他の生徒の答案を生徒同士で採点するなど。困難を抱える生徒にも方法論を理解させるのに有用。３年生は学習指導要領の範囲が広くて時間がなく、協同学習は行わない。	・時間がある１年生では行う。グループ学習だと、困難を抱える生徒への個別指導がしやすい。 ・３年生ではバカロレア試験指導で時間が無いためしない。

数学のバカロレア試験を紹介します。紹介するのは、経済社会科学系と文学系の問題です。数学の試験は、３時間。小問も合わせると約２９問ほど解答を求められます。１問に当てる時間は、約6分強というところでしょうか。

ある自動車貸は、2015 年 3 月 1 日の時点で、合計で 1 万台のヨーロッパ向けの自動車を保持している。保有台数を維持するために、自動車貸は毎年のように 3 月 1 日に、保有台数の 25%を転売し、新車を 3000 台買うことに決めた。会社の車の台数を、数列を用いて数学的モデルで表す。すべての自然数ｎについて、2015＋ｎ年の 3 月 1 日の保有台数を u_n と表す。したがって、u_0＝10000 である。

１．すべての自然数ｎについて、なぜ $u_{n+1}=0.75u_n+3000$ になるか説明せよ。

２．すべての自然数mについて、数列 $\{v_n\}$ を $v_n=u_n-12000$ で表すことにする。

a.数列 $\{v_n\}$ は公比 0.75 の等比数列であることを証明せよ。また、初項を示せ。

b. v_n をｎによって表せ。数列 $\{v_n\}$ の極限を求めよ。

c.すべての自然数ｎについて、$u_n=12000-2000\times0.75^n$ になることを証明せよ。

d.ｂとｃの問題で得られた答えに基づいて、何年もたった後のこの自動車貸の保有台数を推定できるか。

この数学の問題は、経済系、文学系の問題、いわゆる文系の問題なので、それほど難しくはありません。理系の先生は、一度チャレンジしてください。しかし、あることに気づくと思います。「説明せよ」「証明せよ」「推定できるか」というような問いが多く、日本のように「答えを求めよ」という形式ではない。さらに、社会の事象を取り上げ、それを数学モデルとして取り上げることによって、数学を社会問題の解決の「ツール」として活用していることです。大阪府の公立高校の入試問題もこのような傾向で出題されています。

【３】フランスバカロレアが求めるもの、そして二つの高校の共通点と相違点

（１）バカロレア試験が求める力

歴史・地理、英語、数学の試験問題を紹介しましたが、大体、バカロレア試験がどのようなものか、何となく分かっていただけたと思います。そこで、細尾先生がまとめた「バカロレア試験で問われる思考力の特徴」を紹介します。

◎全体的に、資料の分析力と論述・論証力が評価されている。資料から必要な情報を抽出し、比較・関連づけてまとめ、それを授業で習った知識と結びつけ、一貫した論理構成の文章で書く力。または既習の知識をもとに一定の型に沿って論じる力。

◎批判的思考力の重視（社会における支配の構造に気づく、立場の限界を示す、社会の問題を解決できるかどうか検討する、など）。

◎試験時間が長く、問題数が少ないため、思考過程や表現の論理性も問える。例えば、歴史：4 時間で 2 問、英語：3 時間で 21-23 問、数学：3 時間で 29 問、物理化学：3 時間半で 27 問。

この「**資料から必要な情報を・・・**」というところですが、このバカロレア試験と大学入学共通テストがめざすところを比べると、やはりよく似ています。とくに、プレテストで出された問題と比較してみると、よく似ているように思います。

（2）二つの高校の共通点

ヒレー・ド・シャルドネ高校とマシアス高校をフィールドワークした細尾先生は、両校の共通点、さらに全教科を通じての共通点を次のようにまとめておられます。

◎フランスには教科書使用義務がないので、ICT や自作教材を活用。授業のストーリーも教師が作る。（地域の予算により、全ての教室に、プロジェクターとスクリーンが設置）

◎教師はあまり板書せず、口頭での説明がメインであるが、生徒はノートに文章でメモ（注）。

（注）「生徒はノートに文章でメモ」というのを解説します。どういうことかというと、単語でメモをするのではなく、生徒は文章でメモをしているということです。フランスでは「小学校からこの訓練をしている」と細尾先生が紹介していました。これについては、アメリカ・フランス・日本における作文指導の比較研究をされている研究者もおられるという事です。因みに、この文章のメモについて、セミナー後の懇親会で、京都薬科大学の坂本先生が、フランス留学したときに「教授の講義の内容で、聞き取れないところがあったから教えてくれ」と隣の学生に頼んだところ、その学生は教授が話したことと全く同じ内容をノートを見て復元してくれたと紹介してくれました。そして、そのノートを見せてもらうと、フランス語で書かれているのではなく、暗号のような文字で書かれていたということです。日本の速記にあたるようなものでしょうか？

◎教師が発問するだけでなく、生徒も手を挙げて教師によく質問する。

◎教師は論述の課題を出し、日常的に添削（点数だけでなく、コメントつき）

◎間違えた生徒に教師が「答え」を直接教えるのではなく、ヒントを出して考えさせたり、自己評価や相互評価で足らない点を自覚させたり、主体的な学習を促進している。

◎授業に参加しているが困難を抱える生徒には個別指導（場合によっては授業外でも）。困難を抱える生徒も伸ばす方法としての協同学習を実施（時間のある 1・2 年生だけ実施の傾向）

◎校内でバカロレア模擬試験（本番の試験と同じ環境で実施し、校内で採点・添削）（注）

（注）この「バカロレア模擬試験の校内で採点・添削」ということについて説明します。本番のバカロレア試験はフランスの全土を 26 の地区に分け、各教科の問題作成が大学区を基本に行われます。その作成には、視学官と呼ばれる 1 名と大学教員 1 名に多様な高校の高校教員が参加します。そして、試験の採点者は高校教員なのです。だから、校内での模試の作成や採点・添削を高校教員が行うこともフランスの高校教師にとっては「苦ではない」と言えるでしょう。日本の模擬試験が大手教育産業に委ねられているのとは大違いです。私がまだ 30 代の頃は、進学校では自校で実力テストを作成していました。それが、教師の受験指導の力量の向上になると言われていました。今はどの程度行われているのでしょうか・・・。

そして、採点の件です。論述試験を高校教員が採点しますので、採点にばらつきが出ます。採点のばらつきが大きい場合は調整が行われるということですが、フランスでは、日本ほど「公平性・公正性」にうるさくありません。坂本先生曰く「『教授資格（つまり教員免許のこと）を持っている人間は、一生を通じて変わらないし、正しく採点する能力を持っている』というフランス社会の暗黙の前提がある」ということです。実際、フランスの高校教員は優秀な人が多く、大学で授業ができる人がかなりいるということです。

このフランスの文化について、おもしろいエピソードを坂本先生は紹介してくれました。フランスには車の運転免許の更新という制度がないのです。つまり、「一旦免許を取得すれば、その人は、一生運転できる能力を持っている」という文化なのです。だから、「80 歳のおばあさんが、若い頃の写真を貼った運転免許証で車を運転している」ということらしいです。「大丈夫か・・・」と思いますよね。

細尾先生は、二つの学校のフィールワークについて次のようにまとめておられます。

「思考力の指導に関して、指導方法や教育観に、根本的な違いは見受けられない。どちらの学校の教師も、かなりの工夫を行っている。（バカロレア試験の全国順位の差異は）授業とは別のところにある」

と。最初にも紹介したように、二つの高校の保護者の社会構成も似通っているということでした。マシアス高校の資料はありませんが、2016 年―2017 年のヒレー・ド・シャルドネ高校の資料がありますので提示します。

	社会的に恵まれた境遇の生徒			社会的に恵まれない境遇の生徒
	管理職・教員	中間管理職	サラリーマン、職人、商人、農家	労働者、失業者
ヒレー・ド・シャルネド	２２．６％	２０．３％	２７・８％	２８．５％
全国平均	２７．６％	１４．３％	２６．３％	２９．６％

それでは、「ヒレー・ド・シャルネド高校は、2017 年度のフランスバカロレアの順位で、777 位／2277 校、マシアス高校は、2277 位」という差異はどこから生じるのでしょうか？この件についての細尾先生の報告は、非常に興味深いものでした。この長いレポート報告も、この点を先生方に伝えたいが故にあったと言っても過言ではありません。

（３）二つの学校の相違点

それでは、細尾先生のレポートから二つの学校の相違を紹介していきたいと思います。
まずは、ヒレー・ド・シャルドネ高校の校長先生へのインタビューです。

「この高校は、①教員間の協働と②生徒への個別支援が盛ん。それが生徒の学習意欲を促進して、バカロレア試験の好成績に繋がっているのではないだろうか」

次にヒレー・ド・シャルネド高校の教頭先生へのインタビューです。教頭先生は、マシアス高校にも勤務されていたので、両校の比較をできる先生です。細尾先生も仰ってましたが、マシアス高校に「なぜバカロレアの全国順位がこれほど低いのですか？」とは聞けませんので、この教頭先生のインタビューは本当に良かったと報告されていました。

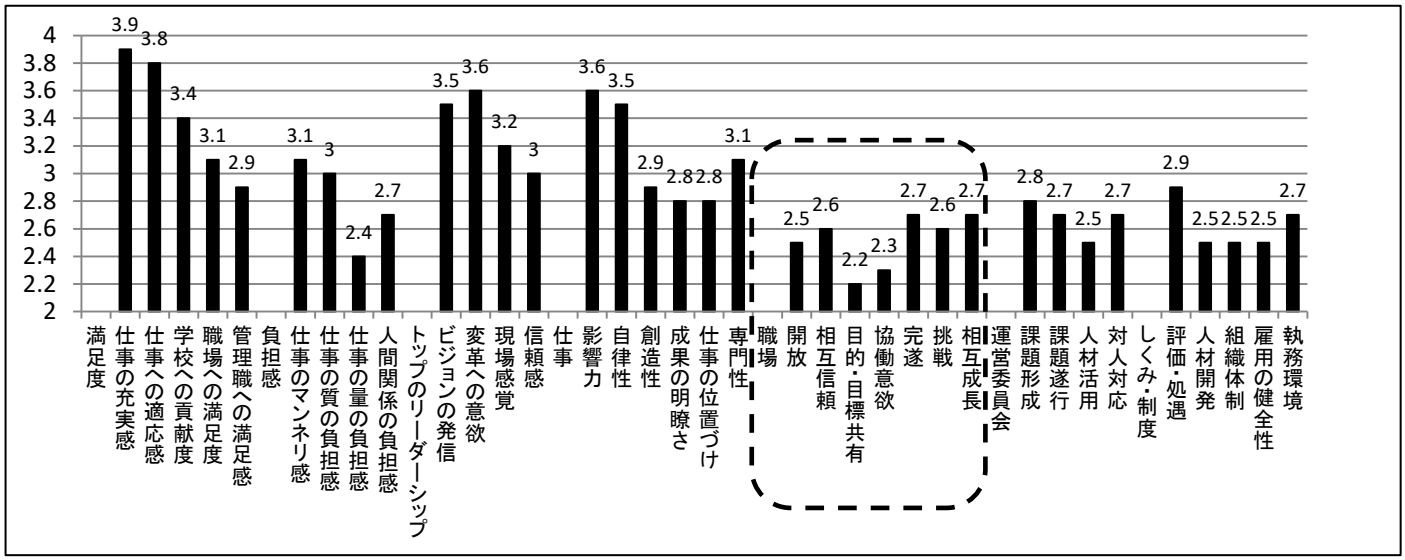
①学校の雰囲気がよい
「管理職と教員の関係が良い。管理職の部屋の扉はつねに開いていて、教員がいつでも入ってこられるので、話しやすい。管理職は授業の前には廊下に立ち、生徒や教師に声を掛ける。一方、マシアス高校は教員の単独プレーであり、いつも一人だった（たしかに、発表者（細尾先生）が行った際、管理職の部屋はいつも閉まり、鍵が掛かっていた）」
「生徒と教師の関係も良い。どの教員も生徒個別的に寄り添う姿勢がある。（早期離学者（注）に最大 2 年間でバカロレアを取得させる『第二のチャンスのリセ』の実践や、歴史・地理のルサージュ教員のポートフォリオ法に加えて、）全ての生徒を対象としたチューター指導を行っている（生徒が校内の教師からチューター教師を選び、個別的指導を仰ぐ）。マシアス高校では、チューター指導は、退学間際の生徒にしか行っていない。」
（注）早期離学者とは、国民教育省評価予測成果局の定義では、16 歳以上の無資格で学校を離れた人を指す。保育学校から高校まで、公的な個別支援策がさまざまに講じられており、「第二のチャンスのリセ」はそのうちの一つである。
②学校の評判がよい。
「学校の雰囲気がよいことに加えて、プロジェクト学習が多くて楽しい、『混ぜる教育（注）』が良いと地域で評判がいい。そのため、学力の高い生徒が学区を越えて入学してくる。」
（注）混ぜる教育：英語などの言語科目、体育・スポーツ、個別学習支援については、学力レベルの高い科学系の生徒と、技術系の生徒の混合でクラス編成。レベルが上の生徒が下の生徒を伸ばし、レベルが上の生徒は社会にはいろいろな人がいることを理解できる。
③学校の立地
マシアス高校は中心部にあるため空き時間に生徒が遊びに行ってしまうが、ヒレー・ド・シャルネド高校の周りには何もないから生徒は学校で勉強する。

この教頭先生の二つの学校の評価を裏付けるように、ヒレー・ド・シャルドネ高校の歴史・地理教員へのインタビューがあります。

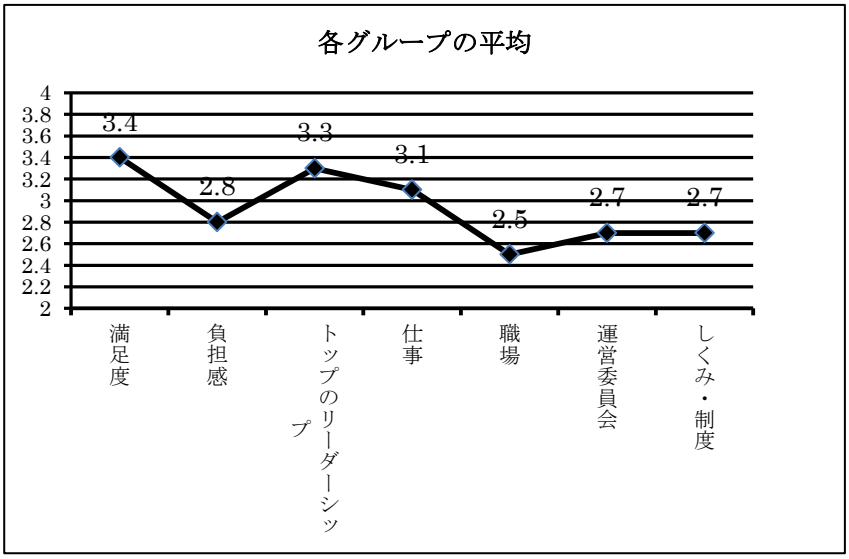
「教員間の協働が盛んである上、生徒の困難に教員が寄り添う体制があるので、この高校ではバカロレア試験の取得率は高いのではないか。生徒に問題があっても、それを担当教員個人の責任にするのではなく、その生徒のクラスを担当する全教科の教員で問題を共有し、各科目での様子を教え合い、対応法を相談することで解決している。問題に対して全ての教師が一貫した対応をすることが、生徒の教師に対する信頼感につながっていると思う。一方、マシアス高校は、各教員が個別に働いているだけで、教員の働く雰囲気がよくない。」

ヒレー・ド・シャルドネ高校とマシアス高校との間にどのような差異があるか、もう私が多くを語る必要はないと思います。覚えておられますか？私が赴任した年の夏に先生方に兵庫教育大学の大学院の「組織をみる」というアンケートを実施したこととを。まず、アンケートの協力者が 27 名と少ないことにビックリしましたが、その結果にもビックリしました。

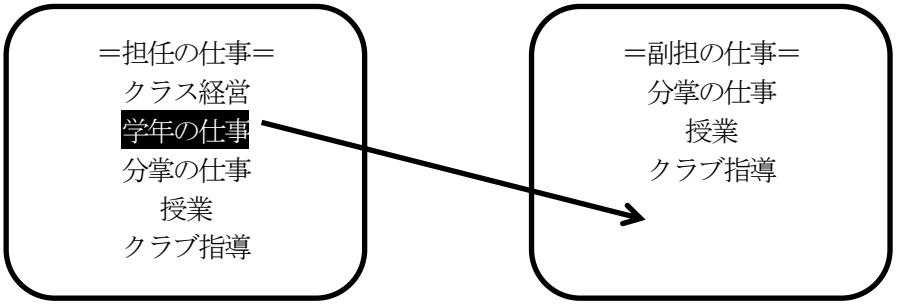
そのときのデータをもう一度掲載します。それが下の棒グラフと表です。注目してほしいのが、職場というグループの肯定感です。このアンケートは、５段階での質問です。職場の質問項目は、次のような内容です。そして、その結果が右端の数値です。



開放	率直な意見交換が行われ、お互いの知識・思い・考えを理解し合おうとしている	２．５
相互信頼	知識や能力のみならず個性や持ち味も認め合い、お互いを職場に必要な存在として尊重しあっている	２．６
目的・目標共有	何のために、何をめざして活動するかということが共有されている	２．２
協働意欲	全員がお互いの役割や仕事の状況に関心をもち、進んで協力し合っている	２．３
完遂	決めたことはすぐ実行し、ルールや期限を遵守しながら、各自が意思と責任をもってやり切っている	２．７
挑戦	難しい課題にも諦めずに取り組み、より高い成果を目指して知恵を出し合って創意工夫を行っている	２．６
相互成長	成功・失敗体験の共有や、相手の成長のための支援・率直なアドバイスを通じて、お互いから学び成長し合っている	２．７



明らかに、職場というグループの各項目の肯定感が低いことが分かります。各グループの平均を折れ線グラフにしたのが、次のグラフです。教員間の協働に関して、明らかに問題点があったのです。今だからはっきり言いましょう。職場の雰囲気はよくなかった。その原因は、仕事量に明らかに格差があるということです。その差が顕著に現れたのが、担任と副担の仕事量です。本来、担任の仕事は、クラス経営にあります。目の前のクラスの生徒を指導し、教育することに仕事の大半をつぎ込むのが担任の仕事です。そして、副担任の仕事は、それをバックグラウンドでサポートすることです。つまり、さまざまな学年の取組、分掌の取組、委員会の取組を中心的に担うことで、担任団をサポートするのが、副担のしごとです。ところが、すでにお気付きのように、〇〇高校の仕事文化は、学年の仕事もすべて担任団で行うというようになっています。これでは、担任は、「クラス経営＋学年の仕事＋分掌の仕事＋授業＋クラブ指導」とあれもこれも仕事が重なってくるのです。副担の仕事は、「分掌の仕事＋授業＋クラブ指導」です。つま



り、左図のようにもともとの仕事量が違うのが〇〇高校の悪しき仕事文化なのです。だから、矢印のように学年の仕事は、副担に回そうと私は提案をしてきました。そして、そのために、「担任も副担も共に学年の運営に関わるために、学年会議を行う」ことを提案しました。学年会議実施には、当然放課後の時間がつぶれます。だから、この案は、先生方の同意を得ませんでした。私からすると「目先の利益を得るために、本来の利益を手放した」と思っています。そして、この後にアイディアをいただいたのは、学年マネージャーの設置です。これは、転勤された先生の提案です。現在、３学年に学年マネージャーが設置されていますが、この役目は、担任間の連携、担任団と副担の連携をその任としています。「何をしなければならないのか」を明記されていない仕事ですので、その仕事内容は、各学年、各担任団、各個人によって、大きく違います。今年の学校教育自己診断時には、この学年マネージャーの導入に効果があったのかどうか、つまり「仕事の格差の解消に向けた効果があったのか」という点について、効果検証を行おうと思います。

さて、この兵庫教育大学の職場アンケート（実は、このアンケートは、全国の市町村教育長の教育行政トップセミナーで提案されたアンケートです）の実施から２年余り経ちました。〇〇高校の職場の状況は改善したでしょうか？もう一度、あのときのアンケートを取ったら、どんな結果が出るか比較検討してみるのも良いかもしれませんね。

【4】私の 10 分のコメント

以上、フランスバカロレアについて、立命館大学細尾先生の報告レポートの紹介です。フランスバカロレアは、1800 年初頭から始まった試験で、200 年以上の歴史があります。その積み重ねの中で、練り上げられてきた思考力テストだと思います。今の一年生から始まる大学入学共通テストに記述式が国語と数学で導入されると世間は騒いでいますが、このバカロレア試験と比較すると、「大人と赤ん坊」といっていいほどの差があるように思います。日本の初等中等教育から高等教育が、今回の高大接続改革で大きく舵を切ったと言っても、フランスバカロレアなどと比較すると、200 年の差があるのです。日本は一体何周遅れなのかと思います。

最後に私が 10 分間でコメントしたことを紹介します。

「まず、今回の高大接続改革が目指すべき『3 つの学力観』の行き着く先のモデルとして、フランスバカロレアの試験があると思います。しかしながら、そこに行き着くにはかなりの時間も労力も掛かる。だからと言って、この方向性を止めることはできない。なぜなら、これが世界のスタンダードだからです。OECD の Education2030 はそのことを如実に物語っています。

ところが、この『3 つの学力観』を進めるにあたって、最も大きな壁は何かと言うと、現場の教師がそのような教育を全くと言ってよいほど、受けたことが無いことです。現場の教師は、自分達が受けたことがない教育をこれから行っていかなければならない。これが最大の壁です。教師というのは、ルーチンワークは得意ですが、新しい創造的な仕事というのは、苦手です。この教師達に、「新しい３つの学力観」に基づいた教育を行ってもらうために、そしてその壁を打ち破ってもらうためには、二つのことが大事だと思っています。一つは、大学が出題する入試問題が変わることです。「京阪神」と言われる関西の国公立のトップの大学が出題する問題は、進学校であればあるほど大きな影響を持ちます。そして、関関同立、近畿大学レベルまでが、今回の高大接続改革を受けて入試問題の傾向を変えていけば、その入試問題に対応するように高校の授業も変えていかなければならないのです。細尾先生が、今回のレポートの報告の冒頭に『高校の教師が思考力を育てようと思っても大学入試が知識重視なら、高校もその入試に対応していくしかない』と大学入試が高校に悪影響を与えていると話されましたが、今の高校現場で、どれだけ多くの教師が思考力を育てようとしているのか。共通一次テストでマークカード方式が導入されて、約 40 年が経ちます。その間、それに対応するような教育と入試問題をクリアしてきた学生が教師になっています。この知識注入型、受験技術の習得に頭を使う入試制度にどっぷりと漬かった先生方です。この先生方には、入試問題が変わる事で、ショック療法がいると思います。

それともう一つは、教科書が変わることです。現在新学習指導要領が内示され、2021 年の実施に向けて、カリキュラム編成の作業がスタートしました。新しい学習指導要領を読んでみると、『どんな教科書になるのか』と思います。しかしながら、本校でもまだまだのんびりしたもので、『主体的で対話的で深い学び』、つまりアクティブラーニングをいたるところで提唱している新学習指導要領にも関わらず、実施率は 40％強の先生でしかありません。危機感が足らないと思います。しかし、このような教師たちも新しい学習指導要領の元で作成された教科書をみたら、慄くのだろうと思います。『教科書が変わる』ことで、『こんな教科書を使って、どんな授業をしたらよいのか・・・』と教師も考え始めるのではないでしょうか。」

というような話をしました。そして、最後に触れたのが、国際バカロレア（ＩＢ）のＴＯＫ「知の理論」です、

【5】ＩＢの「知の理論」

私が、今一番学ぼうと思っているのが、この TOK です。校長室にも数冊の本があります。まだ読んでいません。詳しくは報告をしていなかったと思いますが、私は、創造祭が終了した翌週の土曜日、９月８日（土）に岡山で開かれた国際バカ

ロレア学会第３回大会のシンポジウムに参加してきました。学会には学会員でなければ参加できないのですが、このシンポジウムは、オープン参加でしたので勉強してきました。シンポジウムのテーマは、「IB 生の声を聞こう～Listen to Their Voices～」です。つまり、実際に IB で学んでいる高校生と IB で学んだ大学生の生の声を聞こうという催しです。高校生は、関西学院千里国際高等部 ３年生の生徒、英数学館高等学校 IB コース ２年生の生徒、 大学生は、岡山大学 ４年生と２年生の学生です。彼らがなぜ IB で学ぶようになったかを聞くと、やはりまだまだ IB は「一部のエリート層の教育プログラム」というのが分かります。因みに、シンポジウムは、日本語の質問に対しては日本語で、外国人の先生もたくさん参加していましたので、英語の質問には英語で彼らは答えていました。英語の会話で理解できたのは、２割～3 割程度、情けない限りです。

それはさておき、このシンポジウムで学んだことは、岡山大学の２年生の学生の「IB で学んでよかったことは何か？」という質問に対して、彼女が答えたこの言葉です。

「私が、IB で学んで一番良かったのは、『学び方』を学んだことです。批判的な思考力や、論理性、など、TOK で学んだことがとても大きいと思っています」

TOK については、前から興味を持っていました。本の目次をみても興味がそそられます。しかし、実際に IB で学んだ生徒から生の声を聞くと、やはり意味が違います。TOK の影響力の大きさを実感しました。

ところで、新学習指導要領にも関わる話ですが、今、文科省は道徳教育に力を入れているのはご存知だと思います。小中ではすでに実践されていますし、道徳の評価をどうするかということが話題になっています。高校でも道徳という科目はないものの、道徳教育推進担当者の設置が次年度から義務付けられています。この道徳教育ですが、その内容においては、私はとても幅が広いと思っています。柴山文部科学省大臣が「教育勅語にも良い面がある」とマスコミに発言したことで、結構話題になりましたが、このような復古主義的側面から、現在のグローバリズムに影響されたコスモポリタンリズムや権利と義務をきちんと理解した市民の育成をめざす市民主義まで、道徳教育の含む内容は、とても幅が広いと思っています。予断ですが、経産省が、三菱の研究所に委託して、オランダとイギリスの市民教育の研究の調査をまとめたことがあります。この内容は、とても斬新で、興味を持って読みました。

そこで、今の私の関心は、今後おそらく「上から」実施を求められてくる道徳教育とＩＢで実施されている「知の理論」の融合ができないだろうかということです。道徳とは、ずばり「どう生きるか」の科目です。その内容に「知の理論」の手法と教材を用いて、21 世紀を生きていく創造的な若者を育てることができないだろうかと考えています。そして、この問題意識で少し調べてみました。そうすると、すでに同じような問題意識で挑戦している学校があります。立命館宇治中学・高等学校です。立命館宇治では、すでに「道徳」に関する公開授業研究会が立ち上げられ、実際に公開授業を行っていることがわかりました。また、Ｚ会もＴＯＫに積極的に取り組んでおり、学ぶ機会があれば学んで来ようと思います。こんな話題をメールで細尾先生としていると、「私も IB の TOK に興味があるのですよ。フランスの哲学教育とどこが違うのかと思っています。もし、〇〇高校で勉強会が実施されたら、呼んで下さいね」と仰っていました。そんな機会があれば良いと思っています。

これを読んでも先生方の意識は、「TOK？ナニそれ？」というレベルではないですか？それはそれで、仕方のないことだと思っていますし、私の意識が先走っているのだと思います。過去のことを振り返ると、大体、私の問題意識は、世間的な教員の意識から２年～3 年ほど先走っていると思うようになりました。例えば、

＊私が AL に注目したのは、泉陽高校の教頭時代。実際に世間から注目を浴びだしたのは、その３年後。

＊市岡時代、クラブ活動に休日の制限を入れることを提案しました。生徒にもアンケートを実施すると受験生である 3 年生は、賛成多数ですが、1・2 年生は反対。だから、見送りましたが、その 4 年後の今、休日・平日の部活動に制限が設けられました。

もっと前の話をしましょう。

＊私が教師になって、2 年目に八尾北高校で地域の企業から学ぶ取組をしました。テーマは、「働くことから学ぶ」というテーマで、地域の企業にフィールワークをし、その会社の仕事を学ぶというよりも、そこで働いている従業員の人から聞き取りを行い、働くことのしんどさとやりがいについて学ぶという取組です。当時、この取組を人権教育で行いましたので、同和教育推進委員会の教員から「部抜き」「差抜き」、つまり部落問題や差別の問題を取り上げていないとこっぴどく批判をされました。しかし、この働くことを学ぶ取組は、あの神戸のサカキバラ事件以来、多くの学校で取り組まれるようになったのです。

＊また、この「人権教育」という言葉も、今では普通に使われていますが、私が勤め始めたころは、「同和教育」とか「解放教育」などと呼ばれていました。しかし、実態としては、在日の問題、障がいの問題など、幅広い人権問題を取り上げていましたので、人権教育と呼ぼうと私は提案したのです。これに対しても、周囲の同和教育推進委員の教師から「総すかん」です。10 年ほど経ったある時、偶然当時の委員メンバーと地下鉄で出会いました。その時、「今でこそ、人権教育って普通に言っているけど、最初に言い出したのは、上野さんやな・・・」としみじみとその府立人権の教師が言っていました。

どうも、私からすれば当然の問題意識であっても、教師の世界では、「普通ではない」ということがよくあるのだと思います。しかし、振り返ってみれば、「やはり私は間違っていなかった」と思うことが多いのです。だから、今、私がTOKに注目しているのも、おそらく同じ現象になるのではないかと予想しています。偉そうなこと言ってもはずれるかもしれませんが•••。

【6】最後に

この校長通信、一つの号としては最長のものとなってしまいました。途中で終われなくなくなりました。約束したとおり、英語の模範解答を提示して、この号を終わりたいと思います。

Some time later, Eddie got hungry and grabbed a sandwich out of his rucksack, thinking it would be nice to share it with Beck and have a talk.

"Hey, Beck ! Want some of my sandwich? " he asked.

"Shut up, you fool! You`re gonna scare the fish off! " the old man grumbled.

Undeterred, Eddie stood up and walked up to him. Even though Beck was eyeing him suspiciously, he sat down next to him and showed him his sandwich again.

"Nah I`m not hungry… But thanks anyway" , the old man softened. "I`m sorry I sent you packing, but fish are getting scare these days, what with all that noise from the building sites, and the vibrations from that damned subway…"

"That`s ok, I`m not mad at you. I see what you mean, these new bridges bringing all these gawkers in…"

"And all those cars and high-rises ! It stinks! I can barely breathe anymore ! " Beck coughed, as if to illustrate his point.

"I was born here" , the old man went on, "and I can tell you , I don`t recognize Manhattan anymore. I wonder where it`s gonna end… One day you`ll see, there won`t be any fish left in the river, nor any locust tree to take a nice nap under!"

"There`s nothing much we can do about it, can we? "You can`t stop progress" , as they say…" Eddie said, feeling powerless.

"Well , I disagree! I`ve vowed to fight back! See this rifle here?"

"What do you use that for? Hunting ? " Eddie enquired worriedly.

"Oh no, I don`t hunt! There`s nothing much left to hunt for anyway! No, it`s just to scare away the fools who wanna mess with me or the poachers that go after the wild turkeys…Don`t worry, I won`t shoot you! You`re a nice fellow! " Both men laughed.

"Will you come again tomorrow? " Beck asked.

"I might…" Eddie said.

"See you again, maybe!" （３１２語）